2711.

帝軍及艦實
本國艦ヒ長記

ラ
205

[redacted]艦松島艦は聯合艦隊の旗艦たる任重く縦横自在に廻轉し砲丸數個を受くるも屈する色なく奮進し遂に第四砲は敵丸を受けて發射[illegible]能はざるに至る救援[illegible]八重山の來るや是れに讓つて列を出で大同江沖に[illegible]に遇ふ

[illegible]日の海戰我軍大勝利本艦[illegible]へ行く」の信号を[illegible]佐世保軍港に歸港し直ちに修繕を終へて十九日吳港に入り大本營に戰狀を具陳す然して乘組の將官戰死四人下士卒戰死三十三名負傷ハ將卒を通じて七十餘人以て當日の[illegible]如何に猛なりしか奮戰如何に激なりしかを思ふべし

松島艦は旗艦として前頭に立てるを以て砲彈を受くる最も多く爲めに損傷を[illegible]出でざる可からざるに至り伊東司令長官及び聯合艦隊幕僚は橋立[illegible]來し之を旗艦として浮足立ちたる清艦と併行に進行し之を尾擊したるも日[illegible]し月暈く水雷に備ふる爲め注意し距離を保ち敵艦の所在を見失ひ乃ち昨日の戰鬪地に歸りたり

松島艦副艦長向山慎吉君傳

松島艦は我聯合艦隊の旗艦として黄海の海戰には最も勇戰したる堅艦なり清國艦隊中にも匹敵なく彼の東洋第一の大甲鉄艦定遠號及鎮遠號とも痛く破損を生ずるに至りしは此の大砲丸の力殊に大なり而して此艦副艦長として彼の巨砲を操縱する者は海軍少佐向山慎吉君と爲す當時彈丸雨注の間に號令指揮し爲に微傷を負ふ君黄海々戰の狀を人に語りて曰く余い實に我海兵が斯くまでに勇敢の氣象に富むべしとは思ひ到らざりき余い最初以爲らく戰鬪中首足處を異にし肉破れ骨飛んで甲板上血の雨を降らすに至らば兵士の勇氣も幾分か沮喪すべしと何ぞ圖らん我艦敵の彈丸を受け四十余人一時に倒れたる後は軍氣前に百倍し死屍を飛越えて立働ける樣は眞に驚歎の外なく我れながら我兵士を見損ひたるを耻ぢたり又余は激戰中一兵士の重傷を負ひ倒れたるに遇ひたるに彼は余に謂て「定遠はまだ沈みませぬか」と余は最早發砲する力なきまでにやつッけたりと答へたり勇ましき兵士なりと

帝國軍艦西京丸

西京丸は軍艦に非ざる船なれども當時戰鬪に從ひたる我十餘艘の軍艦は何れも目覺しき勇戰を爲したる中にも中就西京丸の激戰に至りては殊に記すへきものわり是れ其の船を操縱せる樺山中將の豪膽に在るなり其の激戰の狀は本艦は赤城と共に敵艦に面せる方向に於て列外に位地を占めたり既にして戰は開けたり西京丸ハ我艦隊の後に尾し戰ひ激しくなるに從ひ進路を本艦の右舷に變じ激しく敵艦超勇揚威の二艦に迫る忽ち超勇火を失し燒けんとす既にして敵の三十珊半の大砲丸は轟然として響き來りて西京丸の右舷より入り機關室等を破壞したり尙是より先き敵彈の爲めに舵機の頭を毀ち三名傷く西京ハ舵機を損し進退自由ならざるより列外に出でんとして猛然鎭遠定遠二艦の間を突過す其距離纔に七八十メートル而して淸艦は之を衝突する者と認めたるや意外にも開展して西京を避け西京の爲めに路を啓きたり此時淸艦は水雷を放ちたるも中らずして西京ハ事無きを得たり

樺山海軍々令部長畧傳

君名は資紀鹿兒島縣の人なり夙に俊才の譽あり台灣の事あるや清と爭ふべきを論じ西郷、桐野を説いて薩人の議論を一定せしめ遂に政府をして師を出さしむ明治十年西南の役起りたる時君陸軍中佐たり谷將軍に從ひ熊本城を守り屢奇功を奏し平定の後警視總監に任ぜられ累進して海軍大臣となり後后備に編入せらるゝ雖も今や清と兵を交ふるに至り三夜寢ねずして畫る所あり遂に軍令部長に任じ特に現役に服す君が西京丸に乘り敵艦の中に突進して敵艦をして驚き爲めに展開せしめたる如き最も君の豪膽を稱賛せしむ

一般の例に依れば軍艦戰鬪力を失へば白旗を檣頭に掲げて降意を表する習なれども君は苟も日本男子たるもの假令ひ軍艦が戰鬪力を失ふとも亦八面敵に圍まるゝも女々しく白旗を掲げて降參の意を表すべきに非らず萬一にも斯る場合に迫らば一死あるのみ我戰ひには白旗は無用なり見るも汚はしとて白旗は堅く捲き海底へ投入れたりと云ふ

日本帝國軍艦赤城号

軍艦赤城は海軍少佐阪本八郎太氏を艦長に戴き九月十六日午後本艦隊及び第一遊撃艦隊と共に大同江口の艦隊假根據地を出で海洋島に向つて發し十七日年前六時五十八分旗艦松島の命に依り獨り列を離れて海洋島家登學に入り學内を視察す既にして十一時十五分大孤山港沖方位に於て敵の艦隊を認む因て徐ろに午餐を喫し午後零時二十分戰鬪配置に就く既にして一時九分打を始む此時定遠、鎮遠い方に赤城の右舷に在り赤城艦之と對戰し砲聲頗る力む是より先赤城い旗艦の命に依り艦隊の左側に在りしも艦の速力之に續行するに堪へず不知不識孤立の勢をなせり同時二十分頃敵艦來遠及び敵の左翼諸艦赤城に向つて突進し來り其距離僅に八百米突に達す赤城右舷砲は之に對し猛烈に砲擊を續けたれば幾もなくして來遠は艦上殆と人なきに至らしめたり此時赤城亦激しき砲擊を受け死傷多し之に屈せず追ひ來る來遠を砲擊し遂に烈しき火災を起さしめたり

赤城艦長故海軍少佐坂元八郎太君略歴

海洋島の戰に名譽の最期を遂げたる赤城艦長故海軍少佐坂元八郎太氏は鹿兒島縣士族にて幼より穎悟讀書に耽げる明治四年藩兵として上京七月海軍兵學校に入り孜々勉學する所あり十年二月卒業海軍少尉補に任ずるや偶々西南の亂あり君即ち某艦乘組を命せられ直ちに航行して續て河村參軍に從ひ轉戰す凱旋後勳六等に叙し少尉に任じ大尉に進む君頗る航海術に長じ又歐洲留學の宿志あり二十二年三月露國公使館附を命ぜられ聖得堡に在りて海軍の事を研究する殆んど五年昨廿六年に至り公使館詰を免ぜられ英國にて製造の吉野艦回航委員に轉じ直に同國に趣き河原大佐等と同乘して歸朝し同艦副長に補せらる今回征清の事起るや擢んでられて赤城艦長に進み直に韓海に向ひ進發せしが九月十七日の海戰に偉大の功を奏し遂に敵丸に中りて斃る享年四十一君の母堂八年六十現に東京西久保の邸にあり海軍省より戰死の報を傳ふるや從容として毫も愁傷の色を示さゞりしと

帝國軍艦吉野激戰の狀

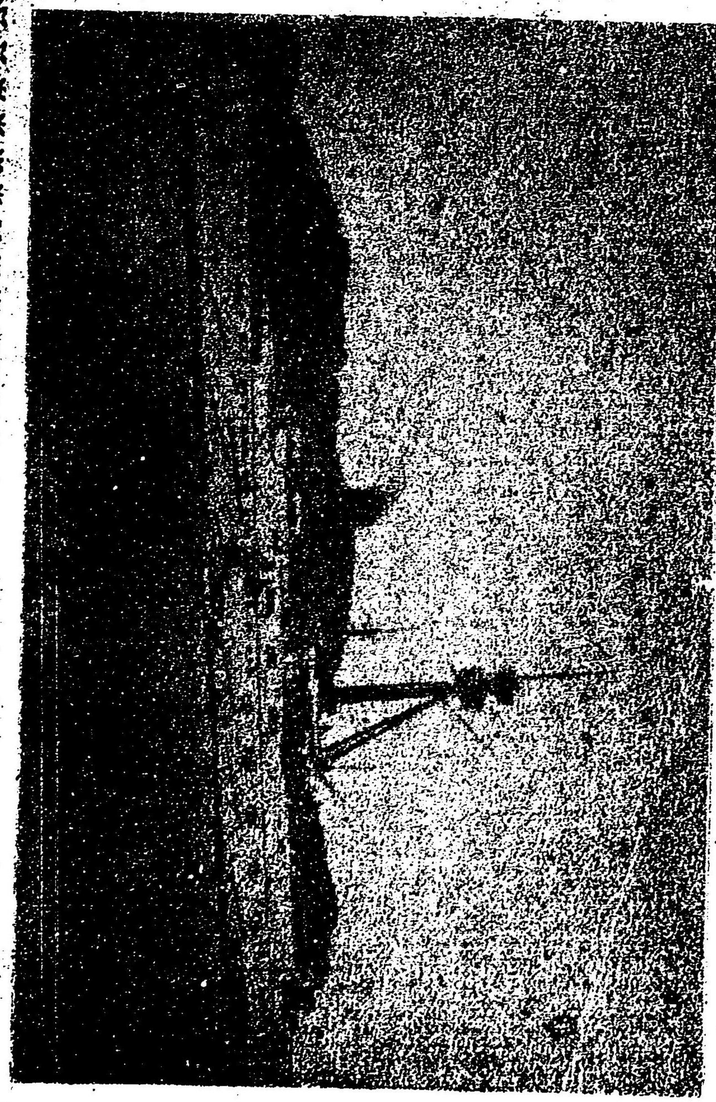
吉野艦は新調の最も宏大堅牢なる艦にして黃海の戰ひには吉野艦い本隊の先導となる（松島艦の旗艦に從ふ千田代、嚴島、比叡、扶桑の六艦を本隊となす）吉野艦に從ふ高千穗、秋津洲、浪速の四艦を第一遊擊隊と稱す敵の艦隊濟遠號は我吉野の堂々として最先に進むを見て彼の豐島に驅逐せられたる怖氣は尙は止まず吉野を見るや直ちに逃仕度をなせり我本隊及ひ第一遊擊は敵の中堅に向つて直進し先進の第一遊擊隊は稍近づくに及んで轉じて敵の右翼を打ち本隊は中堅を突んとす是に於て吉野砲烟硝雨の間だを潛て近々と敵艦に寄ること三千メートル初めて砲擊に應ず此間吉野は敵艦の的となりて彼が砲丸は皆吉野に向つて注ぎぬ鏡面の如き海上忽ちに鯨波を起して白泡素沫高く騰り連發又連發砲烟中天を包みて四方暗黑是時既に第一遊擊隊は敵艦陽威をして出火せしめたり既にして遊擊隊吉野は比叡赤城危の信号を受け直ちに速力を增し赴きて赤城の死戰を救ふ

吉野艦長河原要一君畧歴

兵器精鋭なるも之を用ふる人有爲の者にあらざれば其堅牢且精鋭なるも其用を爲さずして尋常のものと異ることなし之を今回の海戰に徵するに清國の艦隊定遠、鎭遠の如きは世界に知られたる堅艦なり然るに之を操縱する者に於て勇氣なく巧ならざれば遂に擊碎かれ戰は敗北となれり之に反して我艦は西京は郵船會社の商船を御用船としたるもの比叡赤城は其小なること定遠鎭遠の半に過ぎざるなり而して其倍する所の定遠鎭遠と戰ひ彼をして用を爲さゞるに至らしめたるは是れ其の用ふる人豪膽勇猛能く之を操縱するに由るものなり況んや本艦の如き堅牢快駛の艦に於ておや之を操縱せし人ハ誰ぞや河原要一君なり君鹿兒島の士壯にして海軍に入る最も航海術に長ず吉野艦を英國に注文するや留在して其工事を監督し落成して回航するや君即ち艦長たり君今年四十六東洋無比の快駛たる軍艦に搭し激浪を破り奮戰し以て平生の伎倆を顯はし清艦をして復び戰ふの勇なからしむ

帝國軍艦橋立記事

橋立は海防艦艦質は鋼にして其噸數四千二百八十七噸速力は十六ノット黄海の海戰にハ千代田、嚴島、比叡、扶桑の六艦と共に本隊となり戰ふ此等の本隊ハ旗艦の松島と共に吉野艦の先導により遊擊隊の高千穗、秋津洲、浪速の四艦の赤城艦及軍令部長を乘せたる西京丸を後備となし總艦合せて十二隻午前六時五十八分旗艦は赤城艦に命じて海洋嶋象登の奥に入りて視察せしむ須臾にして赤城は隊列に復し報じて曰く奥内異狀なしと同九時過る頃稽上に登りたる番兵敵を認め敵だ々々と大聲に呼ぶ直に艦隊に警戒を與へて前方を凝視ば水平線上二三流の黑烟靉靆として敵艦ハ斯方に有るを示し同時に顯はれ來るは恰も一葉の水に漾ふがごとく見ゆる六隻なりき顧みれば我艦十二隻敵は我の半數なれば快　活なる戰爭は覺束なし我艦隊の鐵堅と駢列進列するを見なゞ敵は例のごとく戰はずして逃るべしと思ひきや敵の六隻は忽ちに九隻となり九隻は既に十四隻となり遂に意外の激戰となれり



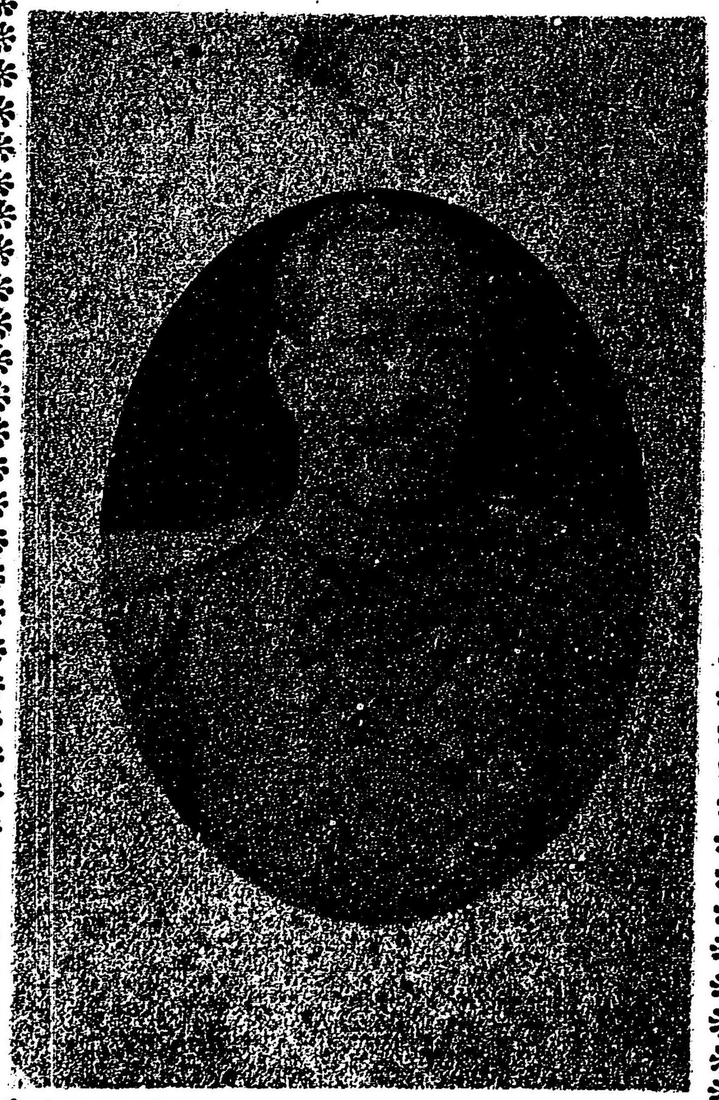
橋立分隊長故海軍大尉高橋篤義君略歴

海軍大尉高橋篤義君は富山縣士族高橋篤の三男母い三輪氏安政五年五月廿五日を以て舊富山藩に生る君天性孝慈氣宇豁達にして遠慮あり又能く事理に通ず君幼時好んで武事を談じ屢々大言壯語を以て老成人を驚かし夙に頭角を藩中に顯す年十四舊藩主前田氏の選拔する所となり今の前田利同伯と共に上京し箕作又村上先生の門に入る既にして國に歸り後單身再び上京す苦學し業大に進む明治七年海軍兵學寮に入り業を卒へ同十二年筑波艦に乘組み直に日本周海巡航を命ぜられ同十三年北亞米利加桑港布哇等を廻航す同十二月海軍少尉補に任ぜられ翌十四年三月乾行艦乘組を命ぜらる同十六年十一月海軍少尉に任じ正八位に敘せらる同十八年十二月摂津艦乘組を命ぜられ同十九年十二月海軍兵學校砲術教授と爲り同月海軍大尉に任ず廿七年五月勳六等に敘し瑞寶章を賜はる同六月橋立分隊長に補し同七月清國に出發す其黄海に名譽の戰死を爲したるハ皆人の知る所なり

高千穂艦長野村貞君記事

高千穂艦は吉野、秋津洲、浪速等と共に本隊たり本艦の戰闘の實況を知り其艦長たる人の如何を知るに足れり今野村君の畧歴を聞漏したれば本艦隊の戰闘實況を記して之に代へんとす而して此艦は遊擊隊にして秋津洲、浪速、吉野等と始終隊列して敵を擊つ即ち第一遊擊ハ敵の中堅に向つて直進し先進の第一遊擊隊は稍近づくに及んで轉じて敵の右翼を打ち本隊は中堅を突かんとす是に於て吉野は砲烟硝雨の間を潜りて近々と敵艦に寄ると三千メートル初めて砲擊に應ず既にして第一遊擊隊は揚威をして出火せしめ敵の右側を通過し其進航を右舷にせんとするや正横に當りて敵の二隻及び水雷艇六隻を見る則ち直に針路を左舷に變じて是を追ふ既にして戰激しくなり互に損傷ありて敵艦の超勇揚威の二艦は既に擊沈められたり

遊擊隊の吉野、高千穂、秋津洲、浪速は敵艦の一部遁るゝものを追ふて彼の來遠を轟沈す其沈沒の狀を形容すれど恰も狂犬の苦むで轉倒し死するが如し



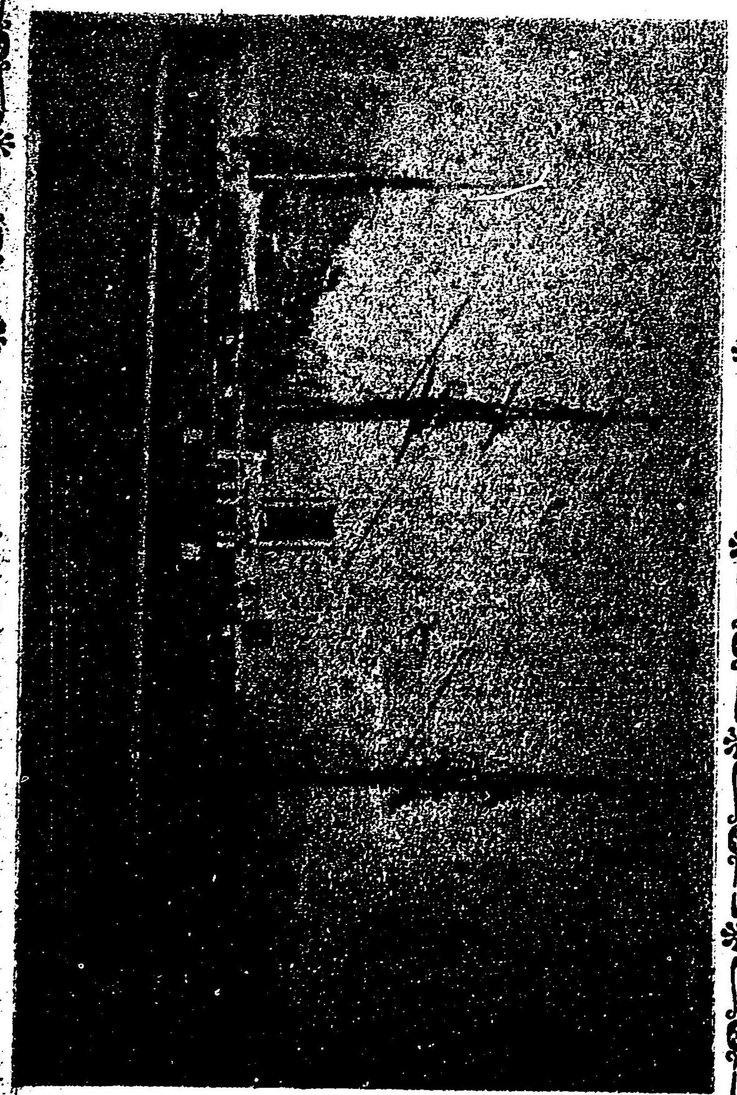
帝國軍艦高千穗記事

高千穗艦は巡洋艦にして艦質ハ鋼其噸數は三千七百九十〇噸速力は十九ノットなり秋津洲、浪速の四艦と合せて第一遊擊隊とす我本艦及び第一遊擊隊の中堅に向つて直進し先進の第一遊擊隊は稍近づくに及んで轉じて敵の右翼を打ち本隊は中堅を突んとす是に於て吉野即ち本隊は砲烟硝雨の間を潛りて近々と敵艦に寄ること三千メートル初て砲擊に應ず此間吉野ハ敵艦の的となる是時既に第一遊擊隊即ち高千穗等は揚威をして出火せしめ敵の右側を通過し其進航を右舷にせんとするや正横に當りて敵の二隻及水雷艇六隻を見る則ち直に針路を左舷に變じて是を追ふ是れ敵艦の廣丙、平遠なり速射一番扶桑の後砲に平遠を燒き將に急進せんとするに旗艦より歸れの信号あり依て再び進路を左舷に轉ず西京丸は漸次に進みて本艦の左側にあり第一遊擊隊の來るに及んで本艦と其間に挿まり危險少なからざるを以て全速力を以て後進し其通過を待ちて再び前進したり

帝國軍艦扶桑戰況

黄海の海戰は松島艦を旗艦として之に從ふ千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑の六隻を本隊とす敵の初めて發砲せしは其距離七千メートルなりしが我艦隊ハ三千メートルまで見合せ殊に比叡は二千メートル以内に敵の來るまで發砲せず斯くて發砲を始むるや我砲丸の始めて確に命中せしは經遠か定遠の中にて白烟の昇るを見て艦員一同拍手せり我艦隊は且つ擊ち且つ進み敵艦亦漸く近づき來り烈しく大小砲を打出し比叡艦の如きは發砲前夥しく彈丸頭上を通過したるが意となさず豫定の距離に達せしとき一齊に發砲したり敵は一直線に來りて方向を變ぜす敵が後部を包まんとするもの丶如し此時比叡扶桑は艦隊の最後に在り其儘前進する時ハ定遠若くは經遠との衝突は免るべからざる勢となりしが比叡は急に船首を右に轉して彼の二艦の間を目掛けて突進せり

扶桑は本隊の後を追ひて本隊と共に運動し赤城西京の如く孤立せざりしなり



帝國軍艦比叡艦

黄海々戰中最も苦戰したるは比叡及赤城の二艦とす赤城は小なるが爲めに敵に侮られ比叡は其の製造の古きが故に速力遲く終に列外に出でゝ敵艦に圍まれたるによる當初比叡は敵を右舷首に見て進むや赤城西京い左側の列外に出して之を掩ひ敵の艦隊を中斷せんと企てたり敵艦此の躰を見るや我が艦の未だ近づかざる前四千メートルの距離に於て既に頻に砲擊を始めたるも我艦隊は應せず進み近づき彼我の距離稍三千メートルなるに至り一齊に發射す此時比叡は殿艦扶桑の前に列り速力の緩きが爲めに前艦と距離を遠かりたれど敵の旗艦定遠号は經遠と共に進み近づきたり危いかな比叡い敵艦近く味方は遠く而も其敵は東洋第一の大甲鐵艦なり我より打ち出す彈丸は彼の艦体に命中するも徒に飛び返りて水中に落るのみ此に於て殆んど死地に陷りたり然れども艦長櫻井君は毫も屈せず其の進退宜しきを得たる爲めに斃れずして免る本艦の戰死者軍醫長三宅貞造氏以下十數人あり

帝國水雷艇小鷹號記事

水雷艇小鷹号は完全宏大なるものにて有名なり此水雷艇を用ふるや度數を計りて發せざれば其効なし今回日清黄海の海戰に支那が我が西京丸に三回發したるも皆其度を失ひて一も中らざりしは我幸なり彼は我西京の前進する一直線に突き來り其艇首の發射管より水雷を發射したるも左舷の七八間に通過して命中せず既にして彼は再び西京の艦首四十メートルの位置に於て旋回發射管より水雷を發射す西京は避く可からざるを知つて覺悟したるに發射の距離切迫なりし故を以て水雷は西京の艦底深く水を潛り艦後に浮び上つて其用を爲さず此に於て勇奮一番漸く危きを脱すれば水雷艇三隻の追躡するあり然れども發射距離に近づき難きを知りて三十分程にして止めたり

我艦隊は水雷を發するの必要なかりしか之を發したるの事を記さず思ふに水雷は其發するに機會ありと雖も敵を防ぎ且擊つに極めて急なる場合にあるを

り

明治二十七年十二月十七日印刷
明治二十七年十二月十日發行

版權所有

編輯兼發行者　大阪市東區博勞町四丁目九十四番屋敷　福井淳

印刷者　大阪市東區和泉町二丁目八番屋敷　前野活版所　前野茂久次

製本發賣所　大阪市西區阿波座中通一丁目七十一番屋敷　矢野松之助

發賣所　大阪市東區南久太郎町四丁目八十六番屋敷　武田福藏

賣捌所　大阪市東區南久太郎町三丁目七十三番屋敷　鳥井正之助

052748-000-8

特53-84

日本帝国軍艦及ヒ艦長実記

福井淳

M27

BFH-0238